

# 高橋亨の韓国学研究

— 儒学・仏教・文学研究を中心に

李 曉 辰\*

- 1.はじめに
2. 儒教研究
3. 仏教研究
4. 文学研究
5. おわりに：高橋の韓国学をどう理解するべきか

## 국문 초록

본 논문은 일제강점기 경성제국대학의 조선문학강좌를 담당한 다카하시 도오루(高橋亨, 1878-1967)의 한국학 연구의 특징과 의의에 대해서 고찰한 것이다. 다카하시는 전 생애를 걸쳐 한국 사상사 및 문학을 연구한 인물로서 그의 연구는 유교·불교·문학의 세 가지 영역을 넘나드는 것이었다. 저작 활동도 활발히 하였으며 대표적인 저작으로 『이조불교』 및 「조선 유학사에 있어서 주리파·주기파의 발달」 등이 있다.

이제까지 학계에서는 다카하시를 어용학자로 규정한 후 그의 저술 속

\* 日本関西大学東アジア文化研究科博士課程/ leehyojinis@gmail.com

本論文は筆者の修士論文『高橋亨と近代韓国学研究—生涯と著作』の一部を修正・補完したものである。

의 제국주의적 요소를 비판하는 경향이 많았다. 하지만 본 논문에서는 보다 다각적인 측면에서 다카하시의 한국학 연구를 검토해보고자 한다. 즉 40여년에 달하는 한국 체류 기간 동안의 그의 연구가 시기별로 어떻게 변화해 왔는지를 살펴보고 그 변화의 의미에 대해 고찰해 보고자 하는 것이다.

다카하시의 유학 연구는 초기와 후기의 퇴계에 대한 평가가 확연히 달라진다. 초기 무관심에서 비판으로 넘어가고 이러한 퇴계를 필두로 한 조선 유교에 대한 비판은 민족성 논의까지 이어지게 된다. 하지만 1930년대 중반에 이르러서는 『斯文』에 「이퇴계」를 연재하며 퇴계를 「위대한 유학자」로 표현하기에 이른다. 이러한 그의 변화는 외적인 요인으로 황도 유학으로 이용하기 위한 방편으로 이해되기도 했으나 조선의 유학에 대한 내재적인 인식의 변화 가능성 또한 검토해 볼 필요가 있다.

한국어 및 한국 문학을 독창성이 없는 중국의 모방에 불과하다며 평가절하하던 다카하시는 스스로 본업이라고 칭한 한국 문학 연구를 진행하며 한국어에 대한 한계와 스스로의 연구에 대해 반성하게 된다. 특히 1928년에 착수한 민요 연구를 통해 점차 한국 문학의 가치를 인정해 나가기에 이른다. 1930년대에 접어들면 1921년 『조선인』의 발표로 정점을 찍었던 민족성 논의 역시 사그라들며 퇴계에 대한 평가도 높아지게 된다. 이러한 변화는 그의 한국학 연구가 일정부분 내재적으로 성숙해졌다는 것을 의미한다고 생각된다.

본 연구에서는 그의 전반적인 연구를 개관함으로써 그 변화와 요인을 검토해 왔다. 분야별로 다카하시의 연구를 충분히 분석하는 것과 다카하시와 같은 일제강점기 재한 일본인 학자의 활동과 업적을 객관적으로 재검토하는 것은 앞으로 해결해야 할 과제일 것이다.

● 주제어 \_\_\_\_\_

다카하시 도오루, 경성제국대학, 이퇴계, 근대 한국학, 근대 학술

## 1. はじめに

本論文は、近代韓国学研究者高橋亨（1878–1967）の韓国学研究の特徴と意義について考察するものである。

高橋亨は韓国の思想・文化・歴史などを初めて近代的学問の対象として認識し、生涯にわたって韓国思想史および韓国文学に関する研究を行った人物である。彼は韓国政府の招待で韓国に移り住み、教育者・研究者・官僚として近代的方法論により「韓国学」（朝鮮学）を構築した。特に1929年（昭和4年）に発表した「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」（『朝鮮支那文化の研究』京城帝国学会法文学会第二部論纂、第一集）は、それ以後の韓国儒学史の枠組みを作ったと言われている。また、著作『李朝仏教』（寶文館、1929年）は韓国最初の近代的方法論による仏教史研究書である。

高橋は1902年（明治35年）東京帝国大学漢学科を卒業し、1904年（明治37年）27歳で渡韓した。その後、40余年にわたって韓国に滞在し、主に総督府から任務を与えられ、教育者・研究者として活動した。高橋は、日本最高学府の東京帝国大学で成熟しつつあった東洋学とりわけ「東洋史学」「東洋哲学」研究の影響を受け、近代的な学問方法を学び、学問的基礎を修得していた。渡韓直後は韓国語の学習に専念し、1909年（明治42年）には『韓語文典』を出版するほど韓国語を自由に駆使できるようになった。同時に宗教調査囑託や図書調査囑託として韓国各地で儒教および仏教を調査し、韓国の文化・思想を理解することに努めた。その長年の韓国語および韓国の文化・思想に関する知識は、高橋が京城帝国大学の朝鮮文学を担当するのに重要な役割を果たすことになった。

以上でわかるように、高橋亨は、研究者・教育者および官僚として活発な活動を行っており、このような高橋をある分野の専門家と規定することは極めて難しい。彼は全生涯にわたって韓国の思想・文学などの様々な領域で研究を行ったからである。そこで、本論文では「儒教研究」「仏教研

究」「文学研究」の3つの側面をとらえ、高橋の韓国学研究の特徴をさぐってみたい。

## 2. 儒教研究

高橋の儒学研究は先行研究の中で最も注目されている分野である。その中では、高橋が提起した主理・主気という枠組が韓国儒学に及ぼした悪影響と、戦後の朝鮮儒学史研究にもこの概念をそのまま採用していることに対する批判が主となっていた。

植民地時代、朝鮮総督府は儒教に注目した。両班および儒林がもつ影響力を利用し、韓国を効果的に支配するためであった。このような儒教の利用は、国民の教化を儒教的道徳観から求めた元田永孚と日本の「教育勅語」の草案を書いた井上毅、ひいては1910年前後に日本で活発に論議された「国民道徳論」を主張した井上哲次郎において儒教が利用される過程と同じであった<sup>1)</sup>。総督府は儒生の調査を行い、成均館を改編して儒林の教育に力を注いだ。

高橋が朝鮮儒学の研究を決意したのも、このような総督府の政策の延長線上にあったといえる。前述したように、高橋は儒生の動向を調査・視察するため三南（忠清道、全羅道、慶尚道）を訪問した際、義兵の机に『退溪集』が置いていることに衝撃を受けたという。調査後、高橋は、雑誌『朝鮮及満州』に「朝鮮儒学大観」を発表した。これは近代韓国における退溪に関するまとまった初めての著作とされる<sup>2)</sup>。その後も、高橋は様々な著作の中で退溪を中心に据えており、李退溪は高橋にとって韓国儒学を

1) リュ・ミナ「일본제국주의하 유교이데올로기의 변용—식민지기 조선의 경학원 운영을 중심으로—」（日本帝国主義下の儒教イデオロギーの変容—植民地期朝鮮の経学院運営を中心に—）『東洋史学会冬季研究討論会』第29回、東洋史学会、2010年2月、82-83頁。

2) 井上厚史「近代日本における李退溪研究の系譜学」『総合政策論叢』第18号、島根県立大学、2010年2月、74頁。

理解するキーパーソンになっていた。高橋は「朝鮮儒学大観」では退溪を中心に論じ、「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」では、退溪と栗谷を軸とする「主理派」と「主気派」という概念を提起し、韓国儒学の学派を大きく二つに分けた。その後、高橋の李退溪に対する関心はさらに高まり、1939年『斯文』に「李退溪」を連載するに至る。

しかし、「朝鮮儒学大観」と「李退溪」では、描かれている退溪像にかなりの違いがある。これは、高橋の退溪の理解が時期によって変わっていったことを示すものである。ここでは、高橋の退溪理解の転換を考察することによって、韓国儒学史に対する高橋の理解と立場がどのように変わっていったかを検討してみたい。

### 1) 張志淵との「紙上論争」

「紙上論争」は1915年、韓国の儒学者張志淵と高橋が韓国儒学理解をめぐって新聞紙面上で行った論争である。「儒者儒学者 不一不二論争」ともいう。この論争は、経学院の提学であった金允植（雲養、1835-1922）の子爵受賞祝賀会での高橋の講演「経学史上の雲養集<sup>3)</sup>」が新聞に公開されたことで始まった。

この講演で高橋は、儒者と儒学者を区分し、宋学を批判して退溪の後学が儒学者（道学先生）になってしまったと批判している。これに反して、栗谷については「儒者を兼ねた儒学者<sup>4)</sup>」と高く評価している。これは、講演の目的を考えると、栗谷学派に属していた金允植に対する称賛のためだったと思われるが、高橋のこのような儒学認識は張志淵の批判を呼び起こし、1カ月にわたる激しい論争に発展したのである。

本論争の最も核心的な論点は、「儒者」と「儒学者」の区分であった。張志淵が「儒者」と「儒学者」を区分することはできないという道統論的な立場から発言したのに対し<sup>5)</sup>、高橋にとって儒学者は、儒学を学問とし

3) 金允植の詩文集。この講演は『毎日申報』1915年5月18日、2面に載せられている。

4) 「栗谷은 儒者로써 儒学者를 兼하여 能히 儒教의 修養의 方面과 実用的 方面을 併히 發揮하고 終에 道学先生의 窠에 陷치 안이 하얏스니」(高橋亨「経学史上の雲養集」『毎日申報』1915年5月18日、2面)

て研究する人々のことで、言い換えれば「訓詁学者」や「性理学者」を意味する<sup>6)</sup>。彼らは孔子のような実践を重んじる「儒者」とはその性格が違うと主張した。

高橋と張志淵は、「儒者」と「儒学者」の区分問題を中心に、韓国儒学をどのように認識するかについて様々な論点から議論を行った。二人は最後まで意見の違いを狭めることができず、1カ月間新聞紙面上で行われた本論争は高橋の転勤により中断された。しかし、この論争は日本と韓国の儒学認識の差を明らかにした事件であり、この時期の高橋の韓国儒学に対する認識が明確に現れたものであった。

## 2) 高橋の韓国儒学史認識の変化—李退溪評価を中心に

1911年の「花潭記<sup>7)</sup>」において高橋は、四端七情論にもあまり触れておらず、退溪も大きく取り上げていない。本格的に李退溪を取り上げたのは、前述のように「朝鮮儒学大観」であった。「朝鮮儒学大観」は1912年『朝鮮及満州』に掲載されたあと、訂正が加えられて1924年『朝鮮史講座』に再録された。しかし、同じタイトルで発表されているものの、二つの論文の内容にはかなり違いが見られる。

1912年の「朝鮮儒学大観」では、高橋は朝鮮儒学の性格を論じているが、党争については注目しておらず、朝鮮性理学を批判する観点も提起されていない。また、儒者・儒学者の区分の淵源を宋学の中に探してい

---

5) 「余는聞儒者는即學者之代名詞라故로字書에曰儒는學者之稱이라하니儒者與儒學者之別이抑有其說歟아……儒者는學者在下之稱이오似不可對而分離者也라今에以儒者儒學者로區別分析은未知其意義之何居也라愚見이淺短에胸頓無故로所欲一質於高明學士之具眼也하노라……」(嵩陽山人「漫筆瑣語(三九)」『每日申報』(影印本) 1918年5月18日、1面)

6) 「夫儒者儒學者,道學者,道學先生學究等의文字는明治學界에서新히案出호者오반다시支那古用의意義와不同함이其意則不佞의第一復書에此를悉하얏노라」(高橋天室「答嵩陽山人」『每日申報』(影印本) 1918年6月3日、1面)

7) 高橋亨「花潭記」『朝鮮』第42号、1911年。花潭は、朝鮮中期の徐敬德(1489-1546)の号。

る<sup>8)</sup>。退溪についても栗谷の言葉を借りて思想の獨創性がないと批判しているが、韓国儒学史における退溪の意義は認め、次ように述べている。

此退溪に及んで儒者の模様が出来上がった、然し乍ら退溪は只聖賢の言葉を遵奉したもので有って、自家の意見と云ふものは発見出来ぬのである。……然し乍ら朝鮮の儒学史と云ふ上から見れば、彼に至って確に朝鮮儒学は一時代を劃して居る<sup>9)</sup>。

そして高橋は、栗谷の立場から退溪を批判している。

嶺南学派を大成した李退溪に就いて論ぜんに、彼は朝鮮千有餘年来第一の大学者で朝鮮の儒学を代表して居る人物なる事は朝鮮人のみならず、日本人も云つて居る所である、余は其人々の批評の如く彼を以つて朝鮮第一の学者と為すか否かは稿を追つて述べる考へであるが、尠くも第一で無いとして第二流には下らぬ学者であつた、殊に其朝鮮の儒学に対する功勞及び彼が後世に与へたる影響は吾々日本人には意想外のものがある而して遂に彼の学派と南人と云ふ政党と相結合して嶺南全部は挙げて彼の学説を奉ずるものと成り、同時に南人と成つて仕舞つたのである<sup>10)</sup>。

栗谷の学説は嶺南学派の退溪の説と開城学派の花潭の説と總ての学派を合せ、大きな頭で以つて一つの完成したる学説を作つたと云ふ様な趣がある<sup>11)</sup>。

このように退溪より栗谷を優位におく立場は、1915年の紙上論争でも確認できる<sup>12)</sup>。高橋が栗谷を高く評価するのは、実践重視の哲学が流行して

8) キム・ミヨン「高橋亨와 장지연의 한국유학사관」(高橋亨と張志淵の韓国儒学史観)『대동철학회지』第55輯、대동철학회、2011年6月、80-81頁。

9) 高橋亨「朝鮮儒学大観」『朝鮮及滿州』第58号、1912年9月1日、19頁。

10) 高橋亨「朝鮮儒学大観」『朝鮮及滿州』52号、1912、31頁。

11) 高橋亨「朝鮮儒学大観」『朝鮮及滿州』64号、1912、16頁。

いた明治儒学界の動向<sup>13)</sup>と関係があると思われる。高橋は、「純粹学者」である退溪より「經世済民の見識を兼備し所謂事務を職る」栗谷<sup>14)</sup>の方を儒者だと考えていたのである。

高橋は、朝鮮儒学者の典型として政治に進まず在野にて性理研究に専念する退溪を挙げている。そして、朝鮮儒学は性理学研究のみの「枯談・空論」に陥り、思想の獨創性は見られないという特徴を指摘し。さらにこのような特徴は党派性論まで繋がり、退溪を典型とする朝鮮の儒学者に対する批判は1927年『朝鮮史講座』所収の「朝鮮儒学大観」になるとさらに強まる。

其の沈潜なる思索と忠実なる研鑽とは蓋し朝鮮の学者に於て第一人者であらう。彼の力によりて完全に朝鮮の儒学をして朱子学派に歸一せしめた。併し同時に学人の思想を拘束し学界をして單一平板ならしめた責も亦大に之を退溪に歸せねばならぬ。退溪の学問は極めて善く朝鮮儒者の思索の型、広く言へば全朝鮮人の学問の型を代表して要するに創思發明に付ては甚だ貧弱であり畢竟朱子学の最忠実なる紹述者たるに過ぎない。従て經書の解疏に至つても集註を以て金科玉条となし朱子以前の古義を索隠せんとするに想到せなかつた。是点に於て我国の荻生徂徠・伊藤仁齋二氏の如きは豪傑儒であつて遂に一派の見地を開いて官学たる朱子派に対して大に

12) 高橋亨「經学史上の雲養集」『毎日申報』1915年5月18日。

「栗谷은儒者로써儒学者를兼해야能히儒教의修養의方面과實用的方面을併히發揮하고終에道学先生의窠에陥치안이하얏스니……」

13) チェ・ジェモク「鄭寅普‘陽明学’형성의 知形図」（鄭寅普‘陽明学’形成の知形図）『東方学誌』第143輯、延世大学国学研究院、2008年参考。

14) 1929年の「李朝儒学史に於ける主理派主氣派の發達」で高橋は、退溪と栗谷の学風を対照している。「退溪は純粹学者、栗谷は学者にして經世済民の見識を兼備し所謂時務を職る俊傑である。人物の相異の如くに学風も相殊なり、退溪は非凡八の聰明記性を具備しながら工夫綿密沈潜を極めて窮理研鑽分を積み毫を累ね歩一步日一日堅実に進み行くに対し、栗谷は豁然として頓悟し一氣に極致を窮尽し容易に論理的体系を組織する」（高橋亨「李朝儒学史に於ける主理派主氣派の發達」京城帝国大学法文学会編『朝鮮支那文化の研究（京城帝国学会法文学会第二部論纂）』第1集、刀江書院、1929年、180-181頁）。



民学の光炎を昂めたのである。是れ抑も日本人と朝鮮人との頭脳の違ふ所であつて将来も必ず永く消滅しない所の両者学風の差違をなすであらう<sup>15)</sup>。

橋は、儒学研究の初期から基本的に退溪を高く評価することはなかったものの、1920年代になるとさらに批判的口調になっていることがわかる。

の理由を知るためには、高橋の著作傾向を見る必要がある。1920年代前後は、高橋の朝鮮人論が確立された時期であった。高橋の朝鮮人論は「第4章 高橋の著作」でも触れたように、『朝鮮の俚諺集附物語』（1914年）にその端緒が見え、1917年に連載した「朝鮮人」で完成した。高橋は、韓国儒学を代表する退溪を「創思發明」が「貧弱」だとして、みずから主張した韓国人の民族性論の根拠（思想上の固着性、思想の従属性）としようとしたのであった。

ところが、退溪に対する高橋の評価は、1930年代中旬に変化を見せる。高橋は1939年から1940年にかけて『斯文』に「李退溪」<sup>16)</sup>を発表したが、そこでは退溪に対する評価がそれまでとはいちじるしく異なっている。

朝鮮の儒学を研究して李退溪に至るに及びて始めて学問道德兼備の偉大なる儒学者に遭遇することが出来る。否独り儒学といふ狭き観点よりでなく広義の文学全般から謂つても李退溪集を得て此に始めて崇拜するに足る高度の水準に達せる朝鮮の文献に接する歡喜に浸るを覚える<sup>17)</sup>。

朝鮮の儒生と称する輩の心術の陋劣なるは決して腐敗せる官吏に譲らない、儒学が名利之学となり学者が名利之徒となつた事が朝鮮の政治の墮落し腐敗する重大原因の一つであつた。是の如き古来朝鮮の学風土風の間において、真に名利之念を掃去りて学者の本分に帰り、都塵を避けて田園に

15) 高橋亨「朝鮮儒学大観」『朝鮮史講座』35-36頁。

16) 高橋亨「李退溪」『斯文』21-11-12; 『斯文』22-1-2-3、1939年-1940年。

17) 高橋亨「李退溪」『斯文』21-11、斯文会、1939、1頁。

栖遅し、外は経伝、内は心、孜孜として聖学を攻究し、年と共に工夫純熟して境界進み、幾百の門徒に大賢と仰がれ、幾多の貴き述作を残し、歿して文廟に従祀せられた我が退溪先生の存在することは炎熱溽暑の日、風穴窟に逍遥して洋々響来たる名手の琴曲を聞くが如くである<sup>18)</sup>。

溪が「創思発明の貧弱」な者から「偉大なる儒学者」に一変した理由は何であろうか。井上厚史は、このような変化について1938年の日中戦争の勃発により「一視同仁のスローガンの下、朝鮮人にも国家総動員体制に参画させるべく、李退溪評価を高めようとした<sup>19)</sup>」ためだと述べた。高橋の李退溪評価の変化を考える時、「植民地朝鮮人の同化」や「改造」、すなわち「半島土人の魂を根本的に救ふ良薬」として李退溪をとらえていたことは明らかだといえるのである<sup>20)</sup>。高橋が1939年に「王道儒教より皇道儒教へ<sup>21)</sup>」を発表したことから考えるとこの説明にも一理ある。

しかし、高橋の退溪に対する肯定的評価は、実は1935年の「朝鮮の儒教」から見られる。

古来朝鮮の儒学者の中、何と言っても其の境界の高く信念の確立し胸中道の世界が開けて当代を導き後世を感化することの偉大なるは李退溪に軼ぐる者はない<sup>22)</sup>。

この論文は、中国での孔子駆逐の動きを批判し、儒教の重要性を論じたものである。高橋は「朝鮮が斯く衰敗の運命に陥ったのは専ら其の父祖先輩の奉じた儒教の与えた罪過である<sup>23)</sup>」と述べ、「真儒」と「俗儒」を区分している。これは、紙上論争で張志淵が主張したとおりの区分であ

---

18) 高橋亨「李退溪」、3-4頁。

19) 井上厚史「近代日本においえる李退溪研究の系譜学」、76頁。

20) 井上厚史「近代日本においえる李退溪研究の系譜学」、77頁。

21) 高橋亨「王道儒教より皇道儒教へ」、『朝鮮』第295号、朝鮮総督府、1939年。

22) 高橋亨「朝鮮の儒教」、『朝鮮』第239号、朝鮮総督府、1935年、33頁。

23) 高橋亨「朝鮮の儒教」、17頁。

る。さらに、1936年の「朝鮮学者の土地平分説と共産説<sup>24)</sup>」では、「李退溪と並称せらるゝ李栗谷は儒学者を以て居常経国済民の時務を忘れず」と退溪を栗谷と同じ位置に格上げし、また「栗谷以外滔々たる無数の朝鮮の儒学者は太抵是れ腐儒の巢を脱せず<sup>25)</sup>」と張志淵の主張を踏襲している。

高橋は、栗谷に関しては常に高く評価していることに對し、退溪についての評価は時期によって、中立（無関心）→批判→称賛のように変化している。これは、退溪に代表される朝鮮儒学に対するみずからの認識変化を意味している。このような高橋の韓国儒学観の変化の理由について、当時の儒学に対する政策変化という外在的要因が挙げられてきた<sup>26)</sup>。しかし、高橋は戦後においても続いて退溪を高く評価している。

是頃朝鮮の儒学界は高麗末期以来の数多くの学者達の累積が実を結んで、遂に朝鮮第一の碩学巨儒嶺南の李退溪を出すに至ったのである<sup>27)</sup>。

このように見ると、高橋の韓国儒学観の変化は、外的要因ではなく、高橋の中にも韓国儒学に対する認識の変化が起きたことによるのではないか。高橋は、中立（無関心）から批判へ移動する際、みずから作った朝鮮人論を研究していた儒教・仏教・文学をもって証明しようとした。批判から称賛に変わる際も、このような内在的要因の可能性も十分考えられる。これについては、「5. おわりに」で詳しく述べたい。

24) 高橋亨「朝鮮学者の土地平分説と共産説」『服部先生古稀記念論文集』、富山房（服部先生古稀祝賀記念論文集刊行会編）

25) 高橋亨「朝鮮学者の土地平分説と共産説」、614頁

26) 井上厚史「近代日本においえる李退溪研究の系譜学」およびのキム・ミヨン「高橋亨の『韓国哲学観』과 내서닐리즘」、2010年参考。

27) 高橋亨「朝鮮の陽明学派」『朝鮮学報』第4輯、朝鮮学会、1953年、133頁。

### 3) 高橋の韓国儒学理解の二つの淵源

高橋は漢学については該博な知識の持ち主だったが、朝鮮儒学は誰に学んだのであろうか。これまで知られているのは、京城高等普通学校時代に知識人と交流したこと、大邱高等普通学校時代にソンビ（士人）たちの客間で儒学に関する話を聞いたということである。前者の代表的な人物が、呂奎亨や鄭万朝である。リ・キョンは「高橋亨 조선유학이해의 허와실」（高橋亨の朝鮮儒学理解の虚と実）で高橋の儒学観は当時交友していた退溪学派の儒学者たちから影響を受けていると指摘している<sup>28)</sup>。

実際、高橋は著作の中でも儒学者たちの言葉を引用している。たとえば、「李朝儒学史に於ける主理派主氣派の發達」の「諸言」で經学院副提学の尹喜求（于堂、1867-1926）の言葉を引用して、

本春溘然として物故した前明鮮学界の大なる遺老故学院副提学尹喜求氏は嘗て朝鮮儒学者の頭腦の七八分は四七論に向って費され、朝鮮儒学に関する。著述の核心は即四七論に在ると言った<sup>29)</sup>。

と述べている。また、高橋は、退溪（少論）と栗谷（老論）に代表される学派の分裂は永遠に合流できないといい、その例として鄭万朝と尹喜求を取り上げている。

手近い例を挙げると今早春物故した副提学尹喜求（老論）と現大提学鄭万朝（少論）二氏に之を見ることが出来る。蓋し二説共に一面の真理を得て居るから代々家の立場が一定すれば各の家の人達は学的良心を傷けることなしに持説を決し得るのである<sup>30)</sup>。

---

28) リ・キョン「高橋亨 조선유학이해의 허와실」『대동철학회지』第55週、대동철학회、2011年6月、109頁。

29) 高橋亨「李朝儒学史に於ける主理派主氣派の發達」、143頁。

30) 高橋亨「李朝儒学史に於ける主理派主氣派の發達」、174-175頁。

故人于堂尹喜求氏も退粟の關係に就ては私と同意見であり、又更に其の意見としく附加へて、若し栗谷彼自身が退溪の門徒たるを承認したならば当時の政情にも非常に大なる変化を与えたであらうと言はれた<sup>31)</sup>。

にも、官立漢城高等学校時代の同僚であった呂奎亨の家を毎朝訪ね、その話を筆記したというエピソードもある<sup>32)</sup>。このように、高橋は韓国儒学を研究する際、特に学派の分類と儒学に対する批判において、当時交わっていた儒学者（漢学者）から多くの情報を得ていたことがわかる。また、紙上論争のような儒学理解をめぐる論議を、訪問した士人の客間などで行った可能性も高い。高橋の儒学記述の中には、当時の韓国儒学界の見解が浸透していたと思われる。

しかし、紙上論争で明らかになったように、高橋は韓国儒学史叙述において近代日本の儒教理解を用いたのである。すなわち、高橋は明治以降、朱子学よりは実践・実行を重んじる陽明学を重視する日本の学界の傾向<sup>33)</sup>や考証学的風潮に基づいて韓国儒学史を説明しようとした。さらに、1910年後半からは植民史観による民族性議論を儒学と結びつけたため、韓国儒学の理解に著しい偏向が生じることになったのである。日本の実践重視の儒学概念を用い、明治学界で使用されている新用語をもって<sup>34)</sup>韓国儒学を語ろうとした高橋の儒学観は、植民史観と結びつけられ不安定な韓国儒学理解をもたらし、いまだ韓国の儒学研究者らによって批判されている。

このように、高橋の韓国儒学研究は、資料と内容においては韓国の儒学界の影響を受けており、方法論と視点では近代日本の儒学概念を用いた。

31) 「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」、180頁。

32) イ・ウンソン『東恩李在鶴回顧録』梨花文化社、2004年、176頁。

33) チェ・ジェモク「鄭寅普‘陽明学’형성의 知形図」（鄭寅普‘陽明学’形成の知形図）『東方学誌』第143輯、延世大学国学研究院、2008年、42-43頁。

34) 「儒者儒、学者、道学者之文字는 明治学界之新按出者則与支那古用之意義是必相同이라하얏스니 盖儒者、儒学者、道学者之名称은自支那周漢以来로通用者오非必日本之新出者나然而至其意義하야는自有其当하야互相適用하교非如足下之區別於実行与否者也니」（嵩陽山人「又答高橋先生 所答(一)」『毎日申報』（影印本）1918年6月5日、1面）

さらに、総督府の儒教政策などの社会・政治的な要因が加わり、高橋の韓国儒学研究は時期も、目的も複雑な側面を有することになった。

### 3. 仏教研究

高橋は、1912年の江原道江陵五台山の月精寺の訪問を機として朝鮮の仏教研究を始めた。月精寺で受けた朝鮮仏教に対する衝撃が彼を朝鮮仏教研究へ導いたのである。月精寺訪問後の1912年10月、高橋は『朝鮮及満州』に「朝鮮の仏教に対する新研究」（第60号）を発表する。これは高橋の初めての仏教関連著作で、「新研究」というタイトルが示すように、従来の仏教研究とは異なる方法論で書かれたものである。

高橋と同時期に韓国仏教研究を行った韓国人研究者としては権相老と李能和を挙げることができる。イ・チェホンは「이능화의 불교학과 근대적 종교인식」（李能和の仏教学と近代的宗教認識）において、近代仏教学と伝統仏教学の差異について、伝統仏教学が護教的教理研究あるいは訓語学的教典の探究を本領としていたとすれば、近代仏教学は客観的で科学的な仏教研究を行うといい<sup>35)</sup>、近代韓国仏教学は韓国の仏教を社会進化論的進歩史観に立脚して研究する歴史学的接近方法から出発したと述べた<sup>36)</sup>。通史的観点から韓国仏教史を記述したのが権相老『朝鮮仏教略史』（1917年）、李能和『朝鮮仏教通史』（1918年）、高橋亨『李朝仏教』（1929年）であったといえる。

権相老<sup>37)</sup>は、韓国最初の仏教月刊雑誌『朝鮮仏教月報』を創刊（1912

35) イ・チェホン「이능화의 불교학과 근대적 종교인식」（李能和の仏教学と近代的宗教認識）、『韓国宗教史研究』第十輯、韓国宗教史学会、2002年、388頁。

36) イ・ボンチュン「불교지성의 연구활동과 근대불교학 정립」（仏教知性の研究活動と近代仏教学成立）、『近代東アジアの仏教学』、東国大学出版部、2008年、14頁。

37) 権相老（1879-1965、退耕）は、韓国近代僧侶、教育者、仏教学者である。1896年に韓国聞慶の金竜字で出家し、1912年朝鮮仏教月報社の社長になる、

年)し、韓国最初の仏教通史『朝鮮仏教略史』(1917年)を著した人物<sup>38)</sup>である。彼は、明進学院(後中央仏教専門学校)の第1回卒業生で、その後、同大学の教師に任命され、同僚であった江田俊雄と3年間の共同作業により『李朝実録仏教紗存』を編纂した<sup>39)</sup>。李能和<sup>40)</sup>は仏教学・宗教学・民族学などを研究した学者で、その『朝鮮仏教通史』は正史および野史を含む韓国側の資料だけではなく、『史記』『高僧伝』などの中国側の資料や『日本書紀』『元亨積書』などの日本側の資料に至るまでの膨大な資料を参照し、後の高橋亨の『李朝仏教』および忽滑谷快天の『朝鮮禪教史』にも多大な影響を及ぼした<sup>41)</sup>という。しかし、高橋亨の仏教研究を代表する『李朝仏教』では、権相老と李能和の研究については触れられていない。

高橋の『李朝仏教』は、のちに忽滑谷快天(1867-1934)の『朝鮮禪教史』(1930年)および江田俊雄の朝鮮仏教研究にも影響を及ぼし<sup>42)</sup>、いまなお朝鮮仏教研究において引用されている。

---

6年間『仏教月報』発行、1923年から1931年まで仏教社の社長になる、『仏教』発行した。1931年から1944年までは、中央仏教専門学校の教授を歴任、1953年に東国大学の初代総長、その後大韓仏教曹溪宗元老院長を歴任した。主要著作は『朝鮮仏教略史』(新文館、1918)があげられる。

38) イ・チェホン「권상로 불교학의 근대적 성격」(権相老の仏教学の近代的性格)『仏教学研究』第4号、2002年6月、45頁。

39) 権相老『李朝実録仏教紗存』、中央仏教専門学校、1935年。

40) 李能和(1869-1943、侃亭・尚玄・無能居士)は、近代韓国の歴史学者・民俗学者で民族啓蒙や教育活動した。1922年から朝鮮史編修事業、1930年から青丘学会参与、1931年に啓明俱樂部組織し、1940年には親日団体である国民総力朝鮮連盟文化部の文化議員として活動した。主要著作には『百教会通』(1912)、『朝鮮仏教通史』(1919)、『朝鮮巫俗考』(1927)、『朝鮮解語花史』(1927)などがあげられる。

41) イ・チェホン「이능화의 불교학과 근대적 종교인식」、409-410頁。

42) チョ・ナンホ「高橋亨의 朝鮮仏教研究」(高橋亨の朝鮮仏教研究)『韓国思想과 文化』20、韓国思想文化学会、2003年、392頁。

## 1) 高橋の朝鮮仏教研究の特徴

高橋は、仏教は朝鮮時代に入ってからその地位を儒教に譲ってしまったと考えていたが、月精寺の訪問以来その考えが間違っていたことに気づく<sup>43)</sup>。「朝鮮の仏教に対する新研究」には、以後の仏教研究に対する意欲が現われている。

高橋の仏教研究の特徴としては、次の点を挙げることができる。

まず、仏教の社会的機能に注目し、仏教の政治的機能を強調した。朝鮮の仏教に対する新研究」の末尾では、仏教の政治的な面を強調し、

此朝鮮の僧侶を如何にす可きかは、為政者の大いに研究す可き価値ある問題だと思ふ<sup>44)</sup>。

と述べている。このような仏教認識は『李朝仏教』にも継承され、その目次からもわかるように高橋は朝鮮の王を中心として仏教を概観している。その中で最も強調したのが中宗の王妃文定王后である。高橋は、文定王后が普雨という法主と仏教を復興しようと計画したエピソードを複数の著作で紹介し、高く評価し与えている<sup>45)</sup>。

(文定王后は) 女性ながらも一隻眼を具ふる者と謂はざるへからず<sup>46)</sup>

或ハ可成僧種ヲ改善シ僧徒ヲ監督シテ以テ其ノ本然ノ清浄生活ニ還ラシメ、漸ク人民教化ニ資セシムルカ是ナリ。…… 文定王后ノ女性ニ罕ナル勁烈不屈ノ勇氣ヲ以テ断行セル僧政モ、其ノ薨去ト共ニ忽チ迹ヲ留メザル

43) 高橋亨「朝鮮の仏教に対する新研究」『朝鮮及満州』60、1912年、14頁：注85所載の高橋亨「緒言」、9-11頁参考。

44) 高橋亨「朝鮮の仏教に対する新研究」、16頁。

45) 高橋亨「朝鮮の仏教に対する新研究」、15頁。

46) 高橋亨「朝鮮に於ける仏教宗旨の変遷」『朝鮮総督府月報』Vol.4 No.10、1914年、32頁。



ニ至レリ47)。

高橋は、文定王后を単なる仏教信者ではなく見識を備えた政治家だとし、文定王后の僧侶試験制度によって優秀な僧侶が選ばれ、仏教が復活することができたと評価している48)。このような考えの背景には、総督府の仏教政策があったと思われる。高橋は、日本の対仏教政策についておおむね賛成し、その意義を次のように述べた。

今や寺刹令發布以来歲月尚短しと雖、朝鮮仏教は明らかに宗教の社会性を復活したれば諸種の点に於いて従前寺刹の状態に変化を来すに至り49)。

しかし、高橋は当時の仏教界の弊害も指摘し、社会性の復活による問題点にも十分に注意する必要があるとして、現在の仏教界の動向にも多大な興味を寄せた。このような高橋の主張が当時の総督府政策にどのくらい受け入れられたかは不明であるが、のちに恵化専門学校長に任命されたことから、高橋が影響力を持っていたことが予想できる。

次に、高橋は仏教を儒教の対立項として認識している。高橋は、仏教は教理ではなく、宗教の社会的意味と機能に注目した。そして、仏教のそのような社会性は、儒教の抑仏政策により喪失したと見なし、朝鮮時代における儒教と仏教の関係に注目した。

つまり李朝の教政は、仏教の宗教的機能を褫奪して之を山中に禁錮し、僧侶の公権を剥いで之を違法生活者に墮したのである50)。

而シテ儒学ノ勃興ハ大ニ排仏説ヲ主張シ、終ニ李朝ニ至リテ仏教ノ布教ヲ禁ジ、四百余年程朱子学ヲ以テ国民ノ信仰ト思想トヲ併セ支配セリ。サレバ、朝鮮仏教ハ国家ノ命令ニ依リテ禁ゼラシテ四百四年間死熄シ51)。

47) 高橋亨『李朝仏教』、303頁。

48) 高橋亨「僧兵斗李朝仏教の盛衰」『朝鮮教育会教育参考資料』2、1924年、23-24頁。

49) 高橋亨「朝鮮寺刹の研究」『朝鮮彙報』、1916年、56頁。

50) 高橋亨「朝鮮信仰文化の二重性と之を統合するもの」『天理大学学報』2-1-2、1950年、1頁。

この他にも、高橋は朝鮮の仏教を論じる際、必ず儒教と仏教の反比例関係を説明する。これは、仏教の盛んであった新羅時代や高麗時代ではなく、李朝の仏教を研究した理由でもあった。

最後に高橋は、仏教はその社会的機能は失ったものの、朝鮮の僧侶の戒律を守る態度は日本より優れていたと高く評価している。

朝鮮の禅は禅機には乏しいが持戒を主と立て、心の修業には深く至る処があった<sup>52)</sup>。

このような戒律を守る僧侶像は、高橋が月精寺で受けた衝撃に起因すると考えられる。高橋はその後も視察と資料収集のためしばしば寺刹を訪問し、文献による研究とともに調査とインタビューによる研究を行っていた。これは、儒教において韓国儒学者たちから聞いた話に基づいて研究したのと同じ方法で、仏教においても当時の韓国仏教界から「予の視察せる範囲に於いて<sup>53)</sup>」情報を得て研究したのである。

## 2) 高橋の朝鮮仏教研究に対する二つの評価

高橋の『李朝仏教』には韓国仏教の膨大な資料が収録されており、その資料的・研究方法論的価値は極めて高い。イ・ボンチュンは、近代期仏教学研究者们によって基本資料が多数構築された<sup>54)</sup>といい、高橋の『李朝仏教』は、植民地主義観点が散見するものの、その仏教研究としての価値を高く評価している。

韓国仏教に対するこのような観点については、別途に論じることができ

---

51) 高橋亨『李朝仏教』、寶文館、1929年、25頁。

52) 高橋亨「山に帰れ」『朝鮮仏教』88、1933年、24頁。

53) 高橋亨「朝鮮寺刹の研究」『朝鮮彙報』、1916年、55頁。

54) イ・チェホン「이능화의 불교학과 근대적 종교인식」、389頁。

る問題だが、これによって彼の研究の意義と価値が減少されることはない。彼は『李朝仏教』で朝鮮時代の仏教のみを対象とし、仏教政策・教壇制度・禪宗門派の発展と沈滞・寺刹土地および僧職の変遷などの問題を幅広く扱っている。そのため、この著述は社会者と関連ある仏教の政策史、教壇史、制度史および思想的韓国仏教研究の道を開拓して見せるのであった<sup>55)</sup>。

儒教とは異なって仏教は、高橋にとって比較的疎い分野であったと思われる。高橋は伝統儒学者の家柄の出身で、渡韓以前は専門的に仏教を研究したことはなかった。また、日本の仏教は韓国のそれとかなり異なっているので、専門的知識を用いての教理の研究よりは、朝鮮仏教の紹介や日本仏教との比較を主とした研究を行った。

高橋は仏教の社会的政治的分析に重点を置いて、朝鮮仏教の歴史は教政史だと主張する<sup>56)</sup>。

兎に角、現在の法主が幾ら勉強しても、社会が自分を認めて呉れず、自分が社会に説教の出来ぬ状態に在ると云ふ事は自然の勢ひとして、彼等を無学の人間の集りと成した、然し乍ら斯くの如き状態に在って尚ほ座禪を一日十二時間も行ったり、一日一万遍の念仏を唱へたり、肉食、妻帯、殺生を禁じて、極めて極端なる禁欲主義を運行して来世の幸福を待つて居ると云ふ事は、吾々の同情に値ひする所である。

若し之れを少し社会的活動の余地を与ふるならば朝鮮の仏教は此所に一轉機を作成して、一生而を打開する事になると思ふ。今日已に法主は日本の新政に依って、一般人民と同等に上り、人外の賤民たる事を脱し得たるを非常に感謝し、更にす可きかは、為政者の大いに研究す可き価値ある問題だと思ふ<sup>57)</sup>。

55) イ・ボンチュン「불교지성의 연구활동과 근대불교학 정립」(仏教知性の研究活動と近代仏教学成立)、16頁。

56) チョ・ナンホ「高橋亨의 朝鮮仏教研究」年、396頁。

57) 高橋亨「李朝仏教に対する新研究」、12頁。

研究初期から政治的側面を有していた高橋の仏教研究は、戦時体制に入るとさらに政治的色彩が増し、『朝鮮』の心田開発特講演集で「朝鮮仏教の依他性」（1936年）を寄稿し、『総動員』に「時局下の朝鮮仏教徒」（1940年）を掲載する。チョ・ナンホは、「植民地時代宗教を担当していた政策のブレインとして、強引な方式よりは穏健な方式で朝鮮の思想を支配しようとしていた<sup>58)</sup>」と当時総督府の宗教政策における高橋の役割を述べ、高橋の政治的経歴と学問的経歴の関連性に注目した。つまり『李朝仏教』の完成は、このような政治的活動の中で作られたとした<sup>59)</sup>。

本当に王法仏教徒とならうとするには、王法仏教徒としての行を積み重ねばならぬ。念々王法の有難きを忘れず、朝に夕に君恩国恩に感謝し、法殿に於て君国の吉祥を祈祷するは勿論、国家より求められる所があれば難易大小を問はず進んで之に応じて奉公の誠を捧げて余念なき生活こそは即ち王法仏教徒の行であらねばならぬ<sup>60)</sup>。

このように、高橋の仏教研究はその資料的・方法論的優秀性にも関わらず、植民地における研究の限界もっていた。高橋の朝鮮仏教研究は、儒教研究とはその動機や出発点が異なり、高橋自身もみずから「朝鮮仏教研究者」と主張することはなかった。しかし、時代的規制から離れた高橋は、戦後「大覚国師義天の高麗仏教に対する経綸に就いて<sup>61)</sup>」や「虚応堂集及普雨大師<sup>62)</sup>」などを発表、それまでとは違う時代あるいは違うテーマからの仏教研究を試みる。

---

58) チョ・ナンホ「高橋亨의 朝鮮仏教研究」、398頁。

59) チョ・ナンホ「高橋亨의 朝鮮仏教研究」、395頁。

60) 高橋亨「時局下の朝鮮仏教徒」、『総動員』2-6、1940年、15頁。

61) 高橋亨「大覚国師義天の高麗仏教に対する経綸に就いて」、『朝鮮学報』第10集、1956年。

62) 高橋亨「虚応堂集及普雨大師」、『朝鮮学報』第14集、1959年。

## 4. 文学研究

高橋の文学研究についての研究はまだ少ない。しかし、高橋は韓国時代を通して韓国の文学に関する論文も多数発表し、戦後日本でも『済州島の民謡』（1968年）を著述した。これについて、大谷森繁は「高橋先生と朝鮮の民謡」で次のように述べている。

先生が朝鮮学の泰斗で、なかんずく朝鮮の儒学（史）や思想史および仏教に関する秀れた研究者であったとは人の知るところであるが、朝鮮の民謡についても数々の業績をのこされていることは、余り知られぬところである。しかし実際には以上の論文<sup>63)</sup>が示すように、済州島訪問以来、先生の専門と目される分野におとらず、この民謡という新しい分野に深い関心を寄せ、集中的に研究された時期があった<sup>64)</sup>。

渡韓初期に高橋は、韓国の物語やことわざを収集して編纂した。『朝鮮の物語集附俚諺』（1910）と『朝鮮の俚諺集附物語』（1914）は、日本語で刊行された関連資料集の中で最も早いものである。また、資料の出典は不明であるが、その内容から推測すると文献説話集や口伝から収集したものだと考えられる。また、比較的興味深い話を中心に選集したため、この本に収録された話は後に発刊された類似の資料集の内容構成にかなりの影響を及ぼしたと考えられる<sup>65)</sup>。

しかし、この二つの著作以後、高橋の関心は韓国文学から思想に移り、儒教や仏教関連のものが多く著された。一方、文学論文は進まず10年以上文学関係論文はほとんど発表していなかった。1927年に「朝鮮文学研究」（『日本文学講座』12、新潮社）が発表されることによって、高橋は再び文学研究に戻ったようである。「朝鮮文学研究」で朝鮮文学について、

63) 高橋の民謡関連論文を称す。

64) 大谷森繁「高橋先生と朝鮮の民謡」、高橋亨『済州島の民謡』（『東方学紀要』別冊2）、1968年、2頁。

65) チョ・ヒウン「일본어로 쓰여진 한국설화/한국설화론」『語文学論叢』Vol.2 4、国民大学語文学研究所、2005年、19頁。

「一、朝鮮文学に現れた民族性」「二、朝鮮文学に於ける純文学の位地」「三、朝鮮文学に於ける小説の位地」「四、朝鮮小説の分類」の概論を述べ、第四章の分類の例として「春香伝」「沈青伝（江上蓮）」「洪吉童伝」の三つの小説の紹介および解題を載せている。おそらくこれらの小説は、物語を収集した時の資料が参考になったと考えられる。

### 1) 京城帝国大学赴任と本格的な文学研究

前述したように、高橋は1926年京城帝国大学の朝鮮文学講座の担当教員になる。しかし、朝鮮語講座を担当した小倉進平が「郷歌及び吏読の研究」で博士を取得したことに比べ、高橋は専門そのものが朝鮮文学ではなかった。そもそも高橋の専門は、漢文で書かれている韓国文学および思想(史)であり、講座のカリキュラムも、文学講座以外に「朝鮮儒学史」(1929年)や「朝鮮思想史開設」(1931-34年)などを採用していた。このようなカリキュラムは、激しい批判を浴びた<sup>66)</sup>。1927年に発表した「朝鮮文学研究」は、このような専門との乖離を克服するため書かれたと思われる。しかし「朝鮮文学研究」には、民族性談論に基づき、朱子学の影響により「朝鮮は純文学の恵まれない国であった<sup>67)</sup>」と評価するなど、韓国文学の研究とは言い難いものであった。高橋本人も「然レドモ本業トナル朝鮮ノ文学研究ハ、文献資料ヲ得ルコト充贍ナラザルヲ以テ遅々トシテ進マズ<sup>68)</sup>」と述べ、文学研究の難しさを語っている。

このような高橋の韓国文学に対する認識が変わったのは、1928年に始めた民謡の研究からである。

我が朝鮮の民謡に手を著けてから最早や五年になる。文献の蒐集も未だ

66) 李光洙および趙潤濟(高橋の指導を受け、1929年卒業)などの韓国文学専門家は、高橋のカリキュラムに疑問を示した。これらについては、パク・クァンヒョンの「高橋亨와 경성제대 『朝鮮文学』 講座研究」に詳しい。

67) 高橋亨「朝鮮文学研究」『日本文学講座』12、新潮社、1927年、15頁。

68) 高橋亨「緒言」『李朝仏教』、2頁。

一向に抄らない。民謡の採集は蓋し文学的資料の蒐集に於て其の最も困難なものゝ一つであらう。而して此の採蒐困難の大なる一理由として、依頼に応ずる報告者の民謡の觀念其のものゝ不明白を挙げねばならぬ。古書に在りては返って民謡の意義、民謡の正体が善くわかりて居た様に思はれるが、近來西洋文学に追隨して此を蒐め、此を研究せんとするに至りてこの概念の正確なる把持が難題となった。といふのは、遠く三千年の上古支那で詩經の編纂せらるゝや、其の所謂国風と称する部分、我々が詩經に於て最も輝かしき文学的価値を認める所の国風といふものは、即ち是れ殷・周の民謡であつた<sup>69)</sup>。

高橋は、民謡でその国の「国風」を見ることができると考え、文学の中で最も価値があるものだと判断した。特に、朱子学に拘束されない民謡は朝鮮庶民の自然の文学として重大な意義を持っていると高く評価した<sup>70)</sup>。高橋は、1932年「朝鮮の民謡」を發表し、本格的に民謡研究に取り組む。高橋はみづから次のように述べている。

私は大正十五年以來京城帝国大学に於て朝鮮語学及文学講座を担任し、初に主として古典的朝鮮文学を講じて居たが、漸く朝鮮の歌謡方面に研究を進め、民謡に至りて初めて従來古典文学に於て味はなかつた朝鮮民族の真実の声活きた詩に接し、之を支那の詩經や古詩、日本の万葉、古今の歌と比較しつゝ研究し限なき感興を發するに至つた。遂に昭和四年に至り、私の講座の専攻学生等と協力して全朝鮮の民謡採集に着手する事にし其の六月朝鮮語学文学研究室の名を以て全鮮の各公立普通学校及各道学務課宛に其の地方の民謡の蒐集報告を依頼した<sup>71)</sup>。

このように、民謡を通じて韓国の文学研究に関心を持った高橋は、京城帝国大学出身の金台俊と共同で、東照宮三百年記念会の補助を受け李朝文

69) 高橋亨「朝鮮の民謡」『朝鮮』201号、朝鮮總督府、1932年2月、15頁。

『朝鮮總覽』（1933年）の収集の「朝鮮の民謡」と同じもの。

70) 高橋亨「朝鮮の民謡」、18頁。

71) 高橋亨『濟州島の民謡』（『東方学紀要』別冊2）、1968年、12頁。

学史の著述を企画する。しかし、この著述が出版されたかどうかは不明である。「著作年表」には昭和14年2月、金台俊と共著「李朝文学史の研究」が服部報公会から刊行されたとあるが、調査したところ、同会発行の『研究抄録』第6輯<sup>72)</sup>には「李朝文学史の研究」というタイトルでプランとしての目次だけが載せられている。その目次は次のようである。

- 第一期 貴族文学継承時代
  - 第一章 鮮初の漢文学
  - 第二章 文芸復興時代
  - 第三章 成宗朝の諸文家
  - 第四章 佔畢門下の經学詞章兩派の政争
  - 第五章 第一期末に於ける文学者
- 第二期 貴族文学の爛熟、山林文学の出現
  - 第一章 漢文唐詩宋学を以て特徴づけられる穆陵盛大の文運
  - 第二章 仁祖頃の大家
  - 第三章 肅宗前後の文芸
- 第三期 閭巷文学の興隆、貴族文学の頹勢
  - 第一章 閭巷文学の台頭
  - 第二章 貴族文学の衰頹
  - 第三章 閭巷文学の全般
  - 第四章 貴族文学の最後

## 2) 民謡研究——濟州島民謡を中心に

当時の民謡の研究は、韓国人としては崔南善と李光洙が各々研究を進め

---

72) 高橋亨・金台俊共著「李朝文学史の研究」『研究抄録』第6輯、服部報公会、1938年10月。



ていて、日本人としては市山盛雄編（1897-?）の『朝鮮民謡の研究』（東京：坂本書店、1927年）があった。

高橋は、民謡の概念を消極的意味と積極的意味に分けて定義した。まず、消極的意味としては、

- ① 童謡といふ子供達だけのうたふ謡ではない。
- ② 特定詩人の作った歌謡ではない。
- ③ 妓や職業的歌集にのみうたはれる歌謡ではない。
- ④ 他の地方から輸入せられてうたはるゝ流行歌ではない。
- ⑤ 知識階級に行はれる歌謡ではない。

とし、積極的意味としては、

或る地方に於て、何時ともなく誰によりてともなく、自然に出来て、而して一般的にうたはれる歌謡である<sup>73)</sup>。

と述べ、このような民謡の特徴が最もよく表れているのが濟州島の民謡だという。民謡研究の初期段階から濟州島の民謡に興味を示した高橋は、「韓国は中央集権をもって強力なる統一的政治を施し来り、各地方の民謡さへも其の存在を許容せず、地方の農夫達も多く中央から流行し来た流行歌をうたふ様になったものと思はれる<sup>74)</sup>」といい、民謡から地方色を探すのが難しいと見ているが、濟州島は、特別自治を認められたところであったため、今なお固有の風俗を保存し、「朝鮮民謡の宝庫<sup>75)</sup>」だと評価した。

特に、高橋は民謡に現われている女性に注目して「民謡に現はれた濟州

---

73) 高橋亨「朝鮮の民謡」、16頁。

74) 高橋亨「朝鮮の民謡」、17頁。

75) 高橋亨「朝鮮の民謡」、18頁。

の女76)」、「嶺南大家内房歌詞77)」、「朝鮮民謡の歌へる母子の愛情78)」などを発表した。しかし、民謡の研究は、思想研究と異なって実地調査に赴かなければならない。また、地方によって言葉と表現が異なり、人によっても差がある。このような民謡採録の難しさを高橋は次のように述べている。

島の女等は杵を抱いて暁方までの悲しい歌を歌ふが、通訳がなければ意味は判らない。たびたび聞かうとすれば恥ずかしがって歌ってくれない。結局何を言ふやら没分暁といふのである79)。

このように様々な困難があったものの、高橋は全国の民謡の収集に全力を尽くした。京城帝国大学の学生と協力と総督府の支援により、かなりの資料を集めることができたとして、次のように回想している。

私が斯く朝鮮の歌謡民謡に大なる関心を示して之に関する数篇の論説をも発表するに至つてから、城大の朝鮮語学文学科リ学生達も翕然として之に呼応して民謡の採集と其の研究に従事し次々に其の業績をば或は卒業論文として或は文学的論文として発表するに至り、正に朝鮮歌謡研究の盛代を現出するに至った。其の重なるもの若干を挙げると、昭和八年には金在喆学士の、「朝鮮演劇史」が公にされ、翌年には金台俊学士の「朝鮮歌謡集成第一輯古歌編」が発表され、昭和十二年には趙潤濟学士の「朝鮮詩歌史綱」が発刊され、同年に金思燁学士が「朝鮮民謡研究」を公にした。

昭和十三年となりて高晶玉学士の卒業論文「朝鮮の民謡に就いて」が著はれ、同年吳泳鎮学士の卒業論文「朝鮮内房歌詞」が著はれた。同年に又金思燁学士の「嶺南民謡の研究」が卒業論文として提出された。此頃民間

---

76) 高橋亨「民謡に現はれた済州の女」『朝鮮』第212号、朝鮮総督府、1933年。

77) 高橋亨「嶺南大家内房歌詞」『朝鮮』第222号、朝鮮総督府、1933年。

78) 高橋亨「朝鮮民謡の歌へる母子の愛情」『朝鮮』第255号、朝鮮総督府、1936年。

79) 高橋亨「民謡に現はれた済州の女」、44頁。

にも朝鮮民俗学会が民謡研究に発足して昭和十二年五月に郷土舞踊と民謡の会を公開した。又総督府学務局編輯課でも加藤灌覚氏を主任として民謡の蒐集を始めた。斯くの如く昭和十年頃から城大と民間有志と相競うて民謡の研究と採収とに従事し其の業績も見るべきものあり、中にも城大の斯学専攻学生等の事業は真摯にして純粹、必ずしも民族主義思想に侵蝕せらるゝ事もなく、其の心血を濺いだ卒業論文は何れも貴重な朝鮮民謡の文献となるものである。其の或物は近頃に至り刊行せられた<sup>80)</sup>。

以上でわかるように、高橋は1928年から民謡研究に着手し、積極的に資料調査と研究を進めた。高橋にとって、民謡は韓国の最も価値ある文学であったため、京城帝国大学の生徒たちにも民謡研究（或いは韓国語で書かれた文学の研究）を薦め、京城帝国大学において活発な民謡研究が行われた。

### 3) 文学研究の限界と韓国文化の再認識

高橋は、渡韓後6年を経て韓国語に自信を持ち、流暢な韓国語を駆使していた<sup>81)</sup>。韓国の文法書を編纂し、物語やことわざを収集する過程で高橋の韓国語に対する自信はさらに高まり、「朝鮮人」（1921）では次のように述べている。

されば斯かる誇るべき文字も朝鮮の文学史思想史には何等重要な価値なく、単に漢文さへ読み得れば輒ち朝鮮の文学及哲学は略ぼ遺憾なく研究せらるゝなり<sup>82)</sup>。

漢文さえわかれば朝鮮の文学もわかるというこのような認識<sup>83)</sup>は、民謡

80) 高橋亨『済州島の民謡』、13-14頁。

81) 高橋亨「自序」『韓語文典』、博文館、1909年、3頁。

82) 高橋亨『朝鮮人』、朝鮮総督府学務局、1921年、23頁。

研究を始めた頃から変わっていく。前述したように、高橋は優れた漢文解読能力を持ち、漢文で書かれた朝鮮文学は無理なく意味を理解することができたが、「純粋な意味での朝鮮文学<sup>84)</sup>」である民謡を研究するには、様々な制限があったのである。

特に我々の様な朝鮮語の語彙的知識の貧弱な者に取りては、難之又難たるを免れない<sup>85)</sup>。

弟子であった大谷が高橋を訪問した際聞いた話からも、漢文で韓国文学を研究することの限界を誰よりもよく認識していたことがわかる。

私は、朝鮮文学の専門は漢文だからね。朝鮮語を習らると同時に、漢文ばかりで書かれた朝鮮文学というものを研究した。そして、研究して見ますというと、朝鮮という国の文学は、なるほどそりゃ文字の使用も自由であるし、詩を作るのも早くもあり、自由でもある。然しながら、結局支那の文学というものを、しかもその時代時代に於ける支那の文学というものを、模して作った文学の範囲を出ないんです。詩もそうであり、文もそうである。そこで僕は、朝鮮の文学というものをね、一番分量に於いて多いところの、朝鮮に伝わる漢文で書いた朝鮮文学というものを、いくら研究しても、ジェニユインというもの、純粋なもの、しかも本当に朝鮮的なもの、吾々日本人が見て尤もだ、朝鮮の文学は此処にあるということを実感して深く感銘するような文学はなかなか無い。またそういうものを伝える諺文も、李朝に至ってできたんだけど、始めの内はこれを軽蔑して使おうとしない。相当長い間、使おうとしない。ところがそういう風に、学者連中や有識階級の連中は、専ら支那を学んで朝鮮文学を作ろうとしたが、之に反

83) パク・クァンヒョンは、これを「朝鮮に関して不可知なものが無いという傲慢」と批判した。(パク・クァンヒョン「高橋亨와 경성제대『朝鮮文学』講座」『韓国文化』40、2007年、49頁参考)

84) 高橋亨「朝鮮の思想宗教及び文学」、333頁。

85) 高橋亨「朝鮮の民謡」、16-17頁。

して朝鮮のいわゆる農民にしろ商にしろ、土農工商の連中というものは、これは朝鮮の政治を丁度鏡に写すように、彼等の心に朝鮮に朝鮮の政治が写っている。で、その写っている朝鮮の政治及び朝鮮の人情、それを捨てておいては朝鮮の文学、また朝鮮人の魂は、それは解るわけにはいかぬと。そう考えて僕は、朝鮮の民謡というものに目をつけた。そして段々やつている内に、始めは京城附近の流行歌とか、或いは唯まあ一時の、朝鮮人の無学の連中の歌う歌とかいうものであつたが、段々それを広げて行くに従い、案外にもずっと昔の風俗の残っている、昔の政治の残っている済州島に於いて、朝鮮民謡というものを見て実に驚嘆した。丁度それは日本の万葉のくにうた、支那の持経のくにうたと全く同じ意味を、内容は違うが全く同じ意味の歌である。それでびっくりして、片方の漢文で書いた朝鮮の文学というものよりもずっと上に、その済州島民や火田民や、悪政にいたたまれんで郷土を逃げて、北に行つてしまつたような人、そういう連中の本当の心の中を歌った歌というものを集めて研究した<sup>86)</sup>。

このように、高橋は韓国固有の文学を、漢文で書かれた文学ではなく、民衆の歌う民謡の中に見出したのである。当初、高橋は韓国文学を「思想上（文化）の固着性」「思想（文化）の従属性」などで表現していた。「朝鮮文学研究」においても、「李朝中世から諺文から小説類が出たが、其の文学的価値は極めて低い<sup>87)</sup>」、「朝鮮の小説の不発達は情けなく憐むべきもの<sup>88)</sup>」など、韓国の純文学の価値認めていない。しかし、1928年から着手した民謡研究を通して高橋は自分の誤解を悟り、韓国文学を再認識することになり、民謡の文学的価値を見出した。民謡研究を進めるほど、高橋が持っていた既存のイメージと固定観念は崩れ、民族性談論は薄れていくのである。高橋はここでようやく「朝鮮人の魂」に触れる内在的理解に達したといえるかもしれない。

86) 大谷森繁「高橋先生と朝鮮の民謡」、高橋亨『済州島の民謡』、2頁。

87) 高橋亨「朝鮮文学研究」、12頁。

88) 高橋亨「朝鮮文学研究」、20頁。

## 5. おわりに：高橋の韓国学をどう理解するべきか

以上、高橋の韓国学を「儒教研究」「仏教研究」「文学研究」という3つの側面から検討してきた。

儒教研究に関して考察したように、高橋の韓国儒学史研究の立場は時期により変化を見せている。退溪評価の変遷がその代表的な例であろう。高橋の退溪評価は、大きく3つの時期に分けることができる。すなわち渡韓直後から1910年代初まで、1914年から1930年代初まで、1930年月中旬から戦後までである。このような変化についてキム・ミョンは、高橋の韓国学研究は1920年代10年間に絶頂期で、30年代に入り、それまでの学問的成果を皇民化の過程の中に位置づけ、これを応用期とした<sup>89)</sup>。1920年代が高橋の学問の絶頂であったことは、間違いない。しかし、30年代以後がそれまでの学問の応用期というには、民謡研究など説明がつかない部分がある。それでは、高橋の韓国学研究に表れている変化をどう理解すればよいのであろうか。

渡韓初期は、交流していた韓国の儒学者たちから韓国儒学を学んだ時期で、韓国儒学史に対する高橋の評価や意見はまだ高いとはいえない。しかし、1910年中頃から高橋自身の学問が確立してくる。1914年の『朝鮮の俚諺集附物語』に端緒が見られる朝鮮の民族性義論において、高橋は10項目を取り上げ韓国人の特色を理解する基準にしようとした。その過程で、朝鮮時代最も影響力が強かった儒学思想をもって「固着性」「従属性」などの民族性の根拠とした。特に、韓国儒学を代表する退溪からそれらを導き出そうとし、韓国儒学に停滞の責任を負わせ、批判を続けた。自分ならではの韓国理解の枠組を作った高橋は、すべての学問をその中に当てはめようとした。このような理解は、20年間続き、より徹底したものになる。この時期の彼のレトリックを見ると、すべての結論を民族性と関連させているように見える。しかし、このような民族性義論は1930年中期から薄

89) キム・ミョン「高橋亨의 ‘한국철학관’과 내셔널리즘」『동양철학』第34輯、한국동양철학회、2010年、406頁。

まってい。それを象徴する事例として退溪評価が否定から肯定へ転換したことを挙げるができる。

高橋の朝鮮仏教観をみると『朝鮮人』で構築した朝鮮人像がそのまま投影されている<sup>90)</sup>。高橋の仏教研究は研究初期から政治的側面に注目しており、30年代を過ぎると仏教関連の著作数も少なくなり、しかも総督府の政策と深い関係を持つものが多くなる。高橋の仏教研究は『李朝仏教』で完成し、その後は国家的必要に応じて書いたものが大部分になるのである。一方、文学研究においては、研究初期においては、韓国の文学は中国の模倣に過ぎないなどの批判が続く。さらに『朝鮮人』では韓国文学といえるものは存在しないとその価値を認めていなかったが、30年代に民謡研究を始めてから韓国文学を再認識し、その価値や意義を認めている。そして、民謡研究においては「固着性」「従属性」などの民族性談論はほとんど見られない。このほか、40年代の儒教研究では、「王道儒教より皇道儒教へ」などの帝国主義に同調する論文を発表したこともある。

高橋の韓国学が時期によってその内容と視点が変わっていくのは、単なる総督府の政策の変遷によるものか、それとも高橋自身の内部における学問的見解の変化によるのか、一概には決めがたいが、おそらくこの両面を持っているのであろう。外在的には、日本人官僚としての義務と固定観念が、内在的には韓国学に対する認識の変化が、高橋の全生涯にわたって変化しながらその韓国学は構築されていったといえよう。

しかし、このような変化は彼の韓国学研究が植民地史観や帝国主義などと無関係になったことを示すのではない。彼は、植民地時代の御用学者であったのは変わらない事実であり、彼が韓国思想に対する視点、すなわち植民地を正当化する歴史観および韓国は儒教のみの社会であったという考えは根本的には変わらない。また、高橋は全生涯にわたって教育者として韓国に滞在し、「教師」の視線で学生を「指導・導く」ということがみずからの、そして日本人の義務だと思っており、このような韓国に対する

90) 川瀬貴也「植民地期朝鮮における朝鮮仏教観—高橋亨を中心に」『大巡思想論叢』第17号、韓国：大真大学校、2004年6月、163頁。

「上からの視線」は、彼のほとんどの著作に表れている。

それにも関わらず、高橋の研究が有している価値は無視できない。権純哲の指摘のように、高橋のように長い間韓国に滞在し、膨大な著作を残した日本人研究者はほとんどいないからである。これまでの研究では「植民地時代の代表的御用学者」という枠組の中で高橋を読んできた。そして、高橋を批判することによって高橋克服を試みた。ところが、ここで検討したように、高橋の韓国学研究は多様な側面を有しており、一つの方向で見るとそれらの総合的理解は難しいと思われる。高橋を筆頭とする多くの在韓日本人研究者たちの活動と業績についてより冷静に見つめ直す必要があるのではないか。

本論文では、高橋亨の著作を時期とテーマによって検討し、その中から見られる変化とその理由について内面的要因を中心に概観した。今後、儒学研究のみに焦点を絞り、高橋の韓国儒学に対する理解が変わっていく過程を具体的に考察していくことが本研究の課題である。

※ 이 논문은 2013년 4월 30일에 투고 완료되어,  
2013년 5월 10일부터 5월 25일까지 심사위원이 심사하고,  
2013년 6월 5일 편집위원회에서 게재 결정된 논문임.



## 【参考文献】

- 高橋亨 「高瀬文学士著楊墨哲学を評す」 『哲学雑誌』 186・187、1902年  
「花潭記」 『朝鮮』 第42号、1911年  
「朝鮮儒学大観」 『朝鮮及満州』 50-52・58・62・64号、1912年  
「朝鮮の仏教に対する新研究」 『朝鮮及満州』 60、1912年  
「朝鮮に於ける仏教宗旨の変遷」 『朝鮮総督府月報』 Vol.4 No.10、1914年  
「経学史上の雲養集」 『毎日中報』 1915年5月18日  
「朝鮮寺刹の研究」 『朝鮮彙報』、1916年  
「儒林界에警告」 『儒道』 第1号、儒道振興会、1921年  
「僧兵斗李朝仏教의盛衰」 『朝鮮教育会教育参考資料』 2、1924年  
「朝鮮儒学大観」 『朝鮮史講座』、朝鮮史学会、1924  
「朝鮮文学研究」 『日本文学講座』 12、新潮社、1927年  
「朝鮮僧侶修禪提要」 『朝鮮総督府学務局宗教課』 第10号、大和商会印刷所、1928年  
「李朝儒学史に於ける主理派主気派の発達」、京城帝国大学法文学会編『朝鮮支那文化の研究（京城帝国学会法文学会第二部論纂）』 第1集、刀江書院、1929年  
「朝鮮に於ける三教合一論の歴史」 『朝鮮研究』、朝鮮研究社、1930年  
「朝鮮の民謡」 『朝鮮』 201号、朝鮮総督府、1932年2月  
「民謡に現はれた済州の女」 『朝鮮』 第212号、朝鮮総督府、1933年  
「嶺南大家内房歌詞」 『朝鮮』 第222号、朝鮮総督府、1933年  
「朝鮮の民謡」 『朝鮮総覧』、1933年  
「山に帰れ」 『朝鮮仏教』 88、1933年  
「朝鮮の儒教」 『朝鮮』 第239号、朝鮮総督府、1935年  
「朝鮮民謡の歌へる母子の愛情」 『朝鮮』 第255号、朝鮮総督府、1936年  
「朝鮮学者の土地平分説と共産説」、腹部先生古稀祝賀記念論文集刊行会編『腹部先生古稀記念論文集』、富山房、1936年  
「王道儒教より皇道儒教へ」 『朝鮮』 第295号、朝鮮総督府、1939年  
「李退溪」 『斯文』 21-11-12; 『斯文』 22-1-2-3、1939年-1940年  
「時局下の朝鮮仏教徒」 『総動員』 2-6、1940年  
「朝鮮学術史」 『世界精神史の諸問題』 2、理想社出版部、1941年  
「白岳文庫旧蔵朝鮮本目録」 『京城書物同好会会報』 12、竜溪書舎、1941年  
「内鮮関係政治文化思想史」 『協和叢書』 第14輯、中央協和会、1943年  
「朝鮮信仰文化の二重性と之を統合するもの」 『天理大学学報』 2-1・2、1950年  
「朝鮮の思想宗教及び文学」 『世界歴史事典』 第12巻、平凡社、1952年  
「朝鮮の陽明学派」 『朝鮮学報』 第4輯、朝鮮学会、1953年  
「朝鮮の公羊学派李白雲」 『朝鮮学会会報』 第21号、1954年

- 「荷亭遺作—演本沈青伝序」『朝鮮學報』第11号、1957年  
高橋天室「答嵩陽山人」『毎日申報』(影印本) 1918年6月3日  
嵩陽山人「漫筆瑣語(三九)」『毎日申報』(影印本) 1918年5月18日  
嵩陽山人「又答高橋先生 所答(一)」『毎日申報』(影印本) 1918年6月5日  
高橋亨・金台俊共著「李朝文學史の研究」『研究抄録』第6輯、服部報公会、1938年  
10月  
김미현「高橋亨와 장지연의 한국유학사관」『대동철학회지』第55輯、대동철학회、  
2011年6月  
「高橋亨의 ‘한국철학관’과 내셔널리즘」『동양철학』第34輯、한국동양철학  
회、2010年  
権相老『李朝実録仏教抄存』、中央仏教専門学校、1935年  
박광현「高橋亨와 경성제대『朝鮮文學』講座」『韓國文化』40、2007年  
류미나「일본제국주의하 유교이데올로기의 변용—식민지기 조선의 경학원운영을 중심  
으로—」『東洋  
史学会冬季研究討論會』第29回、東洋史学会、2010年2月  
리기용「高橋亨 조선유학이해의 허와실」『대동철학회지』第55週、대동철학회、  
2011年6月  
이봉춘「불교지성의 연구활동과 근대불교학 정립」『近代東아시아의 仏敎學』、東國大  
學出版部、2008年  
이응선『東恩李在鶴回顧錄』梨花文化社、2004年  
이재현「권상으로 불교학의 근대적 성격」『仏敎學研究』第4号、2002年6月  
조남호「高橋亨의 朝鮮 仏敎研究」(高橋亨의 朝鮮 仏敎研究)『韓國思想과 文化』20、  
韓國思想文化學會、2003年  
조희웅「일본어로 쓰여진 한국설화/한국설화론」『語文學論叢』24、國民大學語文學  
研究所、2005年  
최재목「鄭寅善‘陽明學’형성의 知形圖」(鄭寅善‘陽明學’形成의 知形圖)『東方學誌』  
第143輯、延世大學國學研究院、2008年參考。  
井上厚史「近代日本においえる李退溪研究の系譜學」『綜合政策論叢』第18号、島根  
縣立大學、2010年 2月  
大谷森繁「高橋先生と朝鮮の民謡」、高橋亨『濟州島の民謡』(『東方學紀要』別冊  
2)、1968年  
川瀬貴也「植民地期朝鮮における朝鮮 仏敎觀—高橋亨を中心に」『大巡思想論叢』第17  
号、韓國：大真  
大學校、2004年6月

## 高橋亨の韓国学研究 — 儒学・仏教・文学研究を中心に

李 曉 辰

本論文は、近代韓国学研究者高橋亨（1878–1967）の韓国学研究の特徴と意義について考察するものである。高橋亨は、研究者・教育者および官僚として活発な活動を行っており、このような高橋をある分野の専門家と規定することは極めて難しい。彼は全生涯にわたって韓国の思想・文学などの様々な領域で研究を行ったからである。そこで、本論文では「儒教研究」「仏教研究」「文学研究」の3つの側面をとらえ、高橋の韓国学研究の特徴をさぐったものである。

高橋の韓国学は時期によってその内容と視点が変わっていく。特に、退溪についての評価は時期によって、中立（無関心）→批判→称賛のように変化している。このような変化には、おそらく政治的目的などの外在的理由だけではなく、学者としても内在的理由もあったと思われる。外在的には、日本人官僚としての義務と固定観念が、内在的には韓国学に対する認識の変化が、高橋の全生涯にわたって変化しながらその韓国学は構築されていったといえよう。

高橋の韓国思想に対する視点、すなわち植民地を正当化する歴史観および韓国は儒教のみの社会であったという問題は根本的に変わらない。それにも関わらず、高橋の研究が有している価値は無視できない。権純哲が指摘したように、高橋のように長い間韓国に滞在し、膨大な著作を残した日本人研究者はほとんどいないからである。ここで検討したように、高橋の韓国学研究は多様な側面を有しており、一つの方向で見るとそれらの総合的理解は難しいと思われる。高橋を筆頭とする多くの在韓日本人研究者たちの活動と業績についてより冷静に

見つめ直す必要があるのではないか。

Keyword : 高橋亨、京城帝国大学、李退溪、近代韓国学、近代学術